

生き生き暮らす雑踏ケア



山崎医師(左)が現れると、デイケアの利用者も笑みがこぼれる(仙台市泉区のいずみの杜診療所で)

いずみの杜診療所

山崎 英樹 医師 53

認知症を
解く

認知症の人が地域で生き生きと暮らせる環境をどう作り上げるか。現場では試行錯誤が続く。

仙台市泉区の「いずみの杜診療所」のデイケア。ここでは認知症の人だけでなく、アルコール依存症や統合失調症の人なども一緒になって、マージャン卓を囲んだり、カラオケのマイクを握ったり、畳のスペースで居眠りしたりと、思い思いに過ごす。私服姿の職員に交じって、洗濯物干しや食事の配膳に忙しく立ち働く認知症の女性たちもい

て、初めて訪問した人には誰が認知症の人か区別がつかない。

まるで街角のような光景に、「雑踏ケア」と名付けられた。少人数ケアを目指してきた従来の認知症介護の流れに逆らうようだが、診療所を開設した山崎英樹医師(53)は「利用者本位のケアを行うには、『ケアする側』と『される側』という上下の関係を取り払う必要があると考えた。病気でケアの仕方を区別することにも利点はない」と狙いを語る。

感情の抑制が利かなくなる前頭側頭型認知症の人は、周囲とトラブルを起こしやすく、ほかの施設に通えなくな

■ 認知症医療支援診療所 身近な地域における認知症の専門医療機関。国は2013年9月から、いずみの杜診療所など全国9か所でモデル事業を始め、14年度からの本格導入を目指している。一般病院や介護施設などと連携し、認知症の早期診断や専門的な助言を行い、認知症の人と家族の生活を支える。

って、この診療所をやってみるケースも多い。薬剤の種類や量を調節し、対応能力の高い職員がそばにつくことで、落ち着いて過ごせるようになるという。

「普段から色々な人がいるので、周囲も多少のことは気にしない。『雑踏』の効用です」と、精神保健福祉士の川井丈弘さん(37)が解説する。

昨秋からは、国による「認知症医療支援診療所」(仮称)のモデル事業が始まった。高齢者支援の相談に応じる各地の地域包括支援センターなどの要請を受け、看護師らが

認知症の疑いがある高齢者を訪ねる。必要に応じて山崎医師が診断を行い、介護サービスなどの支援につなげる。

暴れるなど激しい症状が出て入院せざるを得なくなれば、慣れない環境で症状がさらに悪化し、興奮を抑える薬を多く投与することにもなりかねない。モデル事業では、専門家が早期に治療やケアを行い、入院せずに済むことを目指している。「認知症になっても、安心して暮らせるようにしたい」。山崎医師はそう固く決意している。(連載は飯田祐子が担当しました)